

News Letter

自治医科大学附属病院 卒後臨床研修センター

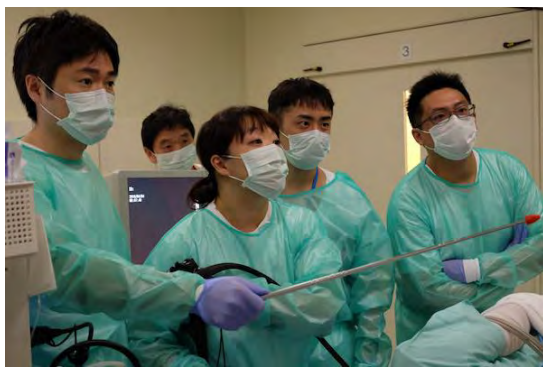
令和3年11月

紅葉の美しい季節となりましたが皆様いかがお過ごしでしょうか？さっそくNewsletter 第44回配信です！ どうぞお楽しみください。

〈診療科紹介 消化器内科〉

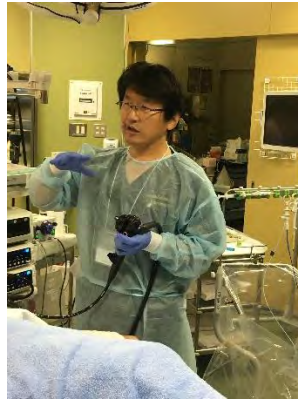
みなさんこんにちは。早速ですが、自治医大といえばやっぱり「地域医療」「総合診療」ですよ！

自治医大は専門疾患から一般病院疾患など多岐にわたって日々診療にあたっています。「自治医科大学市民病院」なんていう人もいます。ちなみに当科も御多分にもれずバラエティーに富んだ患者さんの診療にあたっています。当科は消化管チーム、肝臓チーム、胆膵チームに分かれますが、他大学の消化器内科医局と大きく異なるのは、入院業務においてはチームを超えて全ての疾患に対応するという点です。自治医大ならではのですね。それ故にすべてのチームスタッフが専門を超えて高度な技術を習得しています。指導環境は抜群過ぎます。



さて今度は、自治医大の消化器内科と言えば？

世界中の専門家が口を揃えてこういいます。「Dr ヤマモトの小腸内視鏡（ダブルバルーン内視鏡）」。なにしろ当科の現主任教授の山本がダブルバルーン開発者であり、当時暗黒大陸と言われた小腸領域に光をともしたレジェンドドクターなのです。その他にも内視鏡的粘膜下層剥離術などの早期癌治療においても、その創世記から当科は第一線で先駆けて行ってきており、現在も日本はもちろん全世界へその技術を発信しています。



当科山本をはじめ、たくさんの医局スタッフが世界各国津々浦々、内視鏡指導に出張しています。また逆に世界中の内視鏡医も研修に毎年押し寄せてきます。ワールドワイドです。もちろん英語が基本になりますが、純日本人の皆さん安心してください。英語できなくても会話はできるようになります。本当です！！

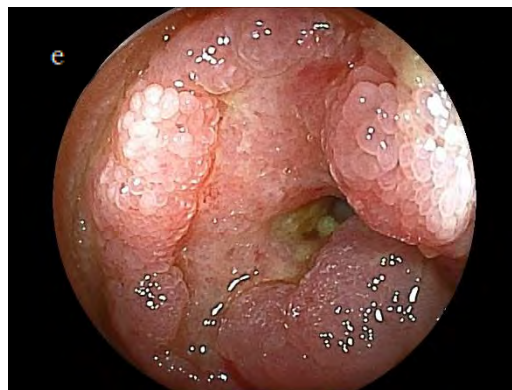
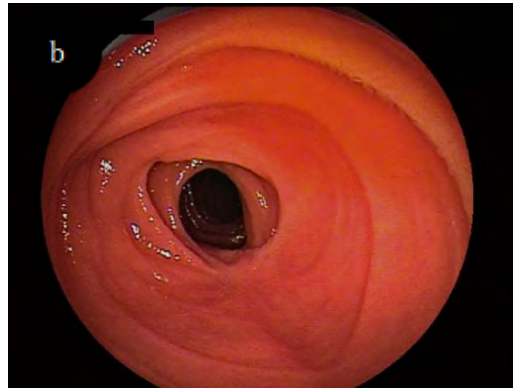


コロナパンデミックが引き金となり、医療界も今まさに時代の変革期を迎えています。時間だけを浪費する不必要なカンファレンスや夜遅くまで病院に残って仕事をすることが称賛される時代はもうオワコンです。コロナ渦中で臨床実習も思うようにできていないかもしれません、しかしながらそんな事すらも、もはやオワコンです。次世代を担うべくみなさんには、その時代にあった新しい方法で成長していくチャンスがあるという事です。そして、そういう新しい力こそ、レジェンド山本のように暗黒大陸を攻略する原動力となるはずで。日々一緒に成長していきたい人、チャレンジしていきたい人、たくさんのチャンスが当科にはあります。心よりお待ちしております。



【医師国家試験予想問題】

Q クローン病の活動期に認める内視鏡所見はどれか？



答え a

a 縦走潰瘍の内視鏡像である。腸間膜付着側に腸管長軸方向に延びる潰瘍を認める。本症例のような Crohn 病の活動期に認める。

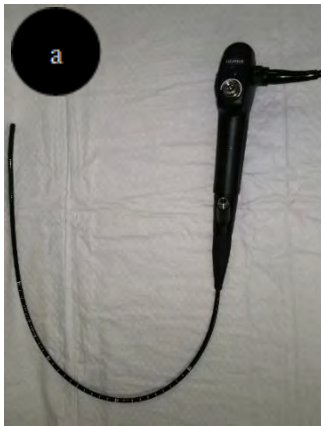
b 潰瘍瘢痕の内視鏡像である。変形は認められるが潰瘍はなく Crohn 病の寛解期に認める。

c 小腸 angiodysplasia の内視鏡像である。小腸出血の原因になる病変。

d Peutz-Jeghers 症候群の内視鏡像である。過誤腫性ポリポシスが特徴である。

e 小腸癌の内視鏡像である。全周性の2型病変で強い狭窄を伴っている。

Q. ダブルバルーン内視鏡はどれか、1つ選べ。



答え d

a 気管支鏡の画像(有効長 60cm)。

b 側視鏡の画像(有効長 124cm)。内視鏡的逆行性胆道膵管造影(ERCP)を行う際に用いる。

c 大腸内視鏡の画像(有効長 133cm)。主にスクリーニング目的に大腸評価のために用いる。

d ダブルバルーン内視鏡の画像(有効長 200cm)。小腸病変の評価のために用いる。

e 小腸カプセル内視鏡の画像。小腸病変のスクリーニング目的に用いられる。